

かみかつちょう

上勝町 (徳島県)

## 地域発ゼロ・ウェイト 推進活動

### ごみゼロを目指したリサイクル、リユースの推進

#### 【取組の概要】 住民一人ひとりの手による日々の地道な取組 「ゼロ・ウェイト」

上勝町には、年間で約 4,500 人もの視察者が訪れている。主な視察の目的の一つは「葉っぱビジネス」、もう一つの目的が、ゴミをゼロにすることをめざした「ゼロ・ウェイト」への取組である。

高度経済成長に伴った大量消費社会の到来で、都市部のみならず農村においても、多くのゴミが発生するようになった。ゴミの量は増加の一途をたどり、その処理を担う自治体に財政負担の増加は重くのしかかるようになった。上勝町でも、かつて野焼きを続けていたが、県からの指導で野焼きを続けられなくなる一方、新しく焼却炉を買って、町内の広い地域のゴミを回収する財政的な余裕はなかった。

そこで、生ゴミは各戸で堆肥化し、それ以外のゴミは分別し、できるだけ多くのゴミを様々なリサイクル事業者を引き渡すことにした。リサイクル事業者を探すうちに、分別の数は 34 種類にも上るようになった。さらに、ゴミは町が回収して回るのではなく、住民によってゴミステーションに持ち込まれる仕組みを作った。

住民の理解と協力により進められたゴミ分別によるリサイクルの取組は、「ゼロ・ウェイト」の運動へと広がっていき、さらに、ゴミ対策は町内だけでは限界があるとして、「NPO法人ゼロ・ウェイトアカデミー」を設立し、その運動を町外にも広げていった。ゴミステーションに隣接して、まだ使える衣類・雑貨等が並ぶ「くるくるショップ」や、リメイク雑貨を作製・販売する「くるくる工房」などの試みも加わった。環境保全活動と林業再生を結び付けようと、木質チップボイラーや薪ストーブの導入が始まり、中学校にある薪ストーブは環境教育にも活用され、将来を担う世代に、ゼロ・ウェイト社会実現に向けた取組の重要性を伝えている。



「日比ヶ谷ゴミステーション」と分別ゴミ

## 1. 上勝町の概要

### “おばあちゃん”たちの笑顔が光る「葉っぱビジネス」

J R 徳島駅からバスを乗り継いで約1時間45分ほど、徳島県のほぼ中央に位置する山間地域に上勝町がある。人口は2,002人、高齢化率47.9%（住民基本台帳2007年3月）、少子高齢化や産業の衰退、森林や農地の荒廃、財政状況の悪化などの問題を抱えている。しかし、上勝町の生き生きとした“おばあちゃん”たちの笑顔は、「葉っぱビジネス」とともに、様々なメディアで紹介され、上勝町の名前を有名にしてきた。

上勝町では、かつてみかん栽培が盛んだったが、1981年に異常寒波に襲われて、みかんの木がほぼ枯死してしまい、多大な被害を受けた。上勝町の農業の再生に向けて営農指導員の一人として採用された若者（横石知二氏）は、山間地域ならではの標高差を上手く生かした栽培を考え出し、1984年には、生産額を災害前の2.6倍に伸ばした。次に横石氏は、上勝町の特産品として、料亭などで料理に添えて季節感を楽しませる葉っぱや花、いわゆる「つまもの」に目をつけた。商品化までに品質の確保や衛生面の確保、安定的に供給するための量の確保などについて模索をし様々な苦勞を乗り越え、1986年、初めての出荷にこぎつけた。このつまものの「葉っぱビジネス」では、山を知り尽くした高齢者たちの持ち味を活かし、交通の便が悪いことなどのハンデキャップを克服。上勝町独自の出荷システムを構築して、市場のニーズに迅速かつ適確に答えることで、厳しい産地間競争を勝ち抜き、全国の料亭などから高く信頼される上勝ブランドを確立した。現在、農業生産者は約190名に上り、中には年収1,000万円を越す人も珍しくなくなった。山に入って木に登ったり、さらにパソコンを操作して市場の情報を確認したり、“おばあちゃん”たちの生き生きとした姿に、世の中は驚かされている。



葉っぱビジネスの「いろいろ」

## 2. 住民の手によるゴミの減量化

### まずは生ゴミの堆肥化から

上勝町では、徳島県から野焼きをやめるように求められていたが、焼却設備を整えたり、ごみ収集にかかる費用を町の予算で賄う余裕はなく、1998年まで発生する大量のゴミを野焼きしていた。

町では、焼却設備を建設する以外の処理の方法はないのかを探ることにし、町内からどんなごみがどれだけ出ているのかを調査し、リサイクルの方策を検討することにした。調査結果から、ゴミの3割（重量比）が生ゴミであることが分かり、生ゴミは、他のゴミに

比べると水分が多く含まれているため、高温での焼却が必要となって、その分、燃料費が多くかかるものであった。そこで、上勝町では、全戸で生ゴミをコンポスト（生ゴミ処理器）等で発酵させて堆肥化する方法を探ることにした。町内では農地や庭を持っている家庭がほとんどであったため、堆肥を有効に利用することができる。コンポストについては、町では既に1991年から購入補助を行っており、新たに電動式の生ゴミ処理機の導入促進を図ることによって、家庭でより簡単に堆肥化できる方法を探ることになった。

1990年代の初頭は、電動生ゴミ処理機を販売するメーカーは限られ、しかもメーカーが指定する特殊な微生物を使う方法をとっていたため、その微生物をメーカーから買い続けなければならないものが多かった。だが、調査をしたところ、隣県の兵庫県に一般微生物を利用した電動生ゴミ処理機を開発している大手家電メーカーが見つかったため、そのメーカーの電動生ゴミ処理機の開発モニターとなることで、協力関係を結ぶこととした。完成した電動生ゴミ処理機は、広葉樹のチップに常在する一般微生物を利用したもので、どの家庭でも容易に使用することができ、1995年には、町が補助することで各世帯が電動生ゴミ処理機を自己負担1万円で購入できることになった。

現在、上勝町では、町民の協力でコンポストもしくは電動生ゴミ処理機の普及率が98%に達し、残りの家庭では直接、畑などを利用して堆肥にしている。また、商業施設でも、業務用の電動生ゴミ処理機を使用しており、生ゴミのリサイクル率はほぼ100%となって、町は生ゴミを回収する必要がなくなった。町民にとっても、生ゴミの回収を待つ必要がないため衛生的で、作られた堆肥は自宅で利用することもできるなど、メリットを享受している。生ゴミの堆肥化を進める自治体は現在では多くなったが、上勝町の取組は、その先駆けとなるものだった。

## ゴミの分別が始まる

1995年、容器包装リサイクル法が制定され、1997年から段階的に施行されることになった。住民はガラスビンやペットボトルを分別し、これを行政が収集して、事業者がリサイクルすることが義務付けられた。これを機に町では、法律で定める以外にもリサイクルできるものがないかを調べ、1997年から分別を始めることになった。

町の担当職員は、全国各地のリサイクル事業者を探し出し、町内から出るゴミを19のリサイクル事業者に引渡すようにするとともに、町内の55の集落を回って、19種類の分別について繰り返し説明を行い、住民の了解を得ていった。分別ゴミの引取先のリサイクル事業者はその後増えて、1998年には25事業者、25分別となった。しかし、どうしてもリサイクル事業者が見つからない種類のゴミもあり、2基の小型の焼却炉を買うことになったものの、1998年、上勝町はようやく野焼きをやめることができた。

## ゴミステーションに住民自身がゴミを運ぶ

野焼きはかつて町内の日比ヶ谷<sup>ひびがや</sup>というところで行われており、そこがゴミ資源の収集場所「日比ヶ谷ゴミステーション」になった。高圧線建設のために電力会社が建てたプレハブの建物が残されており、この建物を使って分別整理することにした。

ゴミステーションには、住民が各自でゴミを運び込むことになったが、家庭の生ゴミは電動生ゴミ処理機で既に処理されており、残りのゴミは頻繁に運ぶ必要がないため、この方法が可能になった。住民は、きちんとリサイクルするために、食品の残りがないようにびんや缶などをきれいに洗って、生ゴミ以外を持って行く。ゴミステーションへの持込は、年末年始の3日間を除く毎日、朝7時30分から午後2時までの間に自由に持ち込むことになっているが、広い町内各地に住んでいる住民たちは、時間やガソリン代を上手く節約しようと、通勤などで日比ヶ谷の前を通る朝や、買い物に出かける日曜日など、何かのついでにゴミを持ち込む。

しかし、高齢者だけの世帯など車を持たない世帯は、ゴミステーションまで自らゴミを運ぶことができないという問題が浮上した。そこで、そうした高齢者世帯のゴミの運搬を引き受けようと、住民有志が立ち上がり、ボランティアグループ「利再来<sup>りさいくる</sup>かみかつ」が生まれた。「利再来かみかつ」では、ゴミを運搬して欲しい人と、運搬できる人を募って、運搬できる人が自分のゴミを持って行く時に、ついでに運搬して欲しい人に声をかけて運搬するという方法を作り上げた。「利再来かみかつ」を立ち上げたメンバーは、かつて町内で行われていた野焼きをどうにかして止められないかと考えるなど、以前から町内の環境問題に強い関心を持っていた人たちで、この活動は、後の「NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー」（後述）に引き継がれることになった。

## さらに34分別でリサイクル

2000年1月に「ダイオキシン類対策特別措置法」が施行された後は、基準値を超えるダイオキシンを排出する焼却炉が利用できなくなった。上勝町が3年前に設置した2基の小型焼却炉のうち、1基はダイオキシン濃度の基準値を超えており、操業できなくなることが分かった。残りの1基だけの操業でなんとかやっていくという方法もあったが、当時の町長は、2基とも閉鎖することを決めて、これまで以上にリサイクルを推進して焼却ゴミを減らすことにした。町長の命を受けた町の担当職員は、なんとかゴミをさらに減量できないかと新たにリサイクル事業者を探し回り、それまでの25種類の分別に加えて、さらに10種類をリサイクルすることが可能となった。

しかし、焼却炉の操業停止の決定から2001年1月15日の実際の停止まで残り1ヶ月を切り、町で住民への説明会を開く時間も無かったため、担当職員たちは、町内の各集落の会合に向いて、ゴミの35種類分別への協力を求めて回った。そして、焼却炉停止と同時に、なんとか35種類の分別を始めることができた。住民たちは協力的で、反発の声はあま

りなく、意外とスムーズだった」と担当職員は話し、「無事スタートできたのは、担当職員の必死の呼びかけのおかげだ」と町長は振り返る。

こうして、上勝町ではゴミを 35 種類に分別した結果、年間 140 トンだった焼却ゴミが、48 トンにまで減量できるようになった（2002 年には、プラスチック類 2 種類を 1 種類に分類するようになり、34 分別となった）。一部のゴミについては、資源として業者に買い上げてもらうこともでき、財政支出の削減にもつながった。

だが、34 種類に分別してもなおどうしてもリサイクルできない焼却ゴミもあり、それらは町外に運ばれて、業者によって焼却処理され、埋め立てられている。町内でまだゴミを完全にゼロにするという訳にはいかず、町外に運び出して焼却していることについて、町長は、「申し訳なく思っています。町内のゴミをゼロにするために、上勝町では更なるゴミの減量と分別を目指して取り組んでいます」と話す。

上勝町では、こうしたリサイクル活動以外にも、これまでに様々な取組を行ってきた。例えば、2002 年から半年間、国の緊急雇用対策事業を利用して、5 人の環境監視員で「G<sup>〇</sup>美レンジャー」を結成して、町内の全世帯に分別の説明を行うとともに、不法投棄の実態についても調査を行うなどした。

### 3. 地道に続く「ゼロ・ウェイスト」の取組

#### **日本初のゴミゼロをめざす「ゼロ・ウェイスト宣言」**

上勝町のゴミ対策は、先進的な取組として次第に全国に紹介され、多くの視察が訪れるようになっていた。2003 年のある日、ある市民活動団体の視察に同行して、アメリカの研究者が上勝町を訪れることになった。セントローレンス大学化学部教授で、焼却による有害物質の危険性を訴え、アメリカの 300 箇所以上で焼却炉の計画を阻止してきた研究者だった。上勝町では、この機会を逃すまいと、その研究者に町内での講演を依頼した。

研究者は講演で、自身が提唱する「ゼロ・ウェイスト」という考えを上勝町の人たちに紹介した。「限りある資源をゴミにしない一番いい方法は再利用すること。再利用できないものは、作り変える。作り変えられないものは、再資源化する。再資源化できないものは埋める。焼却だけはしない。焼くことは、エネルギーを使い、大気を汚染し、地球の温暖化を進めてしまう。埋立てと焼却をなくすよう運動を展開する」というのが、ゼロ・ウェイストが目指す姿だった。

「ゼロ・ウェイスト」運動では、「目標達成の期限を定め、様々な制約を取り除いていく。国内のゴミ関連政策のほとんどが、どうやって焼却するか、といった『対処』であるのに対して、ゼロ・ウェイストは製造者に責任を求めて、ゴミの発生の根本から着手していく。住民は環境についての学習を重ね、ゴミを出さない生産と消費のシステムを構築していく。」

上勝町の人々はこの「ゼロ・ウェイスト」が目指す姿に共鳴し、運動を展開しようと、2003年、上勝町議会が、満場一致で「ゼロ・ウェイスト宣言」を承認した。こうして、上勝町は、日本では初めて、「ゼロ・ウェイスト宣言」をした自治体となった。

### **上勝町ゼロ・ウェイスト宣言**

未来の子どもたちにきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を継承するため、2020年までに上勝町のごみをゼロにすることを決意し、上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）を宣言します。

- 1 地球を汚さない人づくりに努めます！
- 2 ごみの再利用・再資源化を進め、2020年までに焼却・埋め立て処分をなくす最善の努力をします！
- 3 地球環境をよくするため世界中に多くの仲間をつくれます！

平成15年9月19日  
徳島県勝浦郡上勝町

## **NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミーの設立**

上勝町のゴミに関する取組は、行政主導で進められてきたが、2003年の「ゼロ・ウェイスト宣言」がその方法を大きく変えることとなった。「ゼロ・ウェイスト宣言」に基づき、発生ゴミを根本からなくそうとしたが、町による町内だけの取組では限界があり、町外全国はもとより、全世界に取組を広げていく必要があった。そこで、「ゼロ・ウェイスト」の活動をさらに広げていくために、2005年、「NPO法人（特定非営利活動法人）ゼロ・ウェイストアカデミー」が発足した。

ゼロ・ウェイストアカデミーは、ゼロ・ウェイスト推進のための普及啓発や調査研究、ゼロ・ウェイスト商品の開発・普及などを行うと同時に、町より委託を受けて、「日比ヶ谷ゴミステーション」の管理をしており、さらに、隣接している上勝町介護予防活動センター「ひだまり」の業務を指定管理者として行っている。「ひだまり」には、ゼロ・ウェイストアカデミーの事務局と、リメイクを専門とする「くるくる工房」（後述）が入っている。

## ①日比ヶ谷ゴミステーション

前述の「日比ヶ谷ゴミステーション」には、住民が持ち込むゴミを34種類に分別するための容器が分かりやすいように整理されて並んでいる。ゴミを入れる容器も、ゴミの形状などに合わせて、ドラム缶や廃材などを利用して手づくりで作られている。シルバー人材センターのスタッフ5名がローテーションで勤務し、持ち込まれてきたゴミの整理整頓に当たっている。平日と土曜日は1名だが、ゴミが運ばれてくることの多い日曜日には、3名のスタッフが待機している。

スタッフは、持ち込まれたゴミを整理整頓するだけでなく、ゴミの中から使えそうなものを資源として、ちょっとしたリメイクもする。一斗缶で作られた家庭用のちりとりは好評で、持ち帰る人が多い。持ち込まれたタンスの引き出しで、蛍光管の収納箱を作ったりもする。

ゴミを持ち込んできた住民は、分別の方法が分からない時は、常駐するスタッフに尋ねたりするため、ゴミステーションでは、次第に会話が生まれるようになってきた。ゴミ処理場とは、普通ならあまり住民が寄り付かないものだが、上勝町では社交の場となっているという。

上勝町では、2006年、独居老人で車を持たない世帯の住民たちを対象として、高齢者等収集支援事業を開始した。それまでは、前述のボランティアグループ「利再来かみかつ」が、その運搬支援を行っていたが、全くの無償ボランティアでは継続することが難しいということと、ゴミの運搬を頼む側も無償では気兼ねする面があったことから、有償の支援事業として発展的に再スタートすることになった。また、ゴミの持ち込みは、自己負担が45リットルの袋で一袋210円だが、町の福祉予算から1袋200円の補助金が出ているため、高齢者の負担は1袋10円となっている。

## ②くるくるショップ

「日比ヶ谷ゴミステーション」のプレハブの中にある「くるくるショップ」には、衣類や雑貨、家電製品など、まだ使用できるものが並ぶ。「ショップ」と言っても、すべて無料で持ち帰ることができる。

「くるくるショップ」は、上勝小学校の子供たちが、総合学習の時間に日本や上勝町のゴミ問題を調べ、その学習の一環としてゼロ・ウェイストアカデミーに協力してもらって開店させた。「くるくるショップ」という名前も子供たちが話し合っただけで決めた。現在は、子供たちからゼロ・ウェイストアカデミーが引き継いで運営を行っている。

最近では、ゴミステーションにゴミを持ってきた住民が隣の「くるくるショップ」に立ち寄るといった流れができています。また、町外のまち中に買い物に出かける前に、目当ての商品と同じものが「くるくるショップ」にないか、まずチェックしてから行くという住民も増えてきた。ショッピングセンターに買い物に行くとなると車で1時間は掛かるため、

もしも「くるくるショップ」に欲しいものがあれば時間もお金も節約できる。家電などの掘り出し物があると、すぐ無くなっているというから、それなりの頻度で住民がチェックに来ているということが分かる。

「くるくるショップ」で一番人気は子供服となっているが、中にはベッドの寝台部分だけが欲しいという人もいたり、「誰が何を欲しいかは予想がつかない」と、担当者はいう。時々、「こんな物は誰も持ち帰らないだ



くるくるショップ

ろう」と思っていたものを持ち帰る人もいる。持ち込みは町内の住民に限定されているが、持ち帰りなら町外の人でもできるため、例えば、視察や取材に来て持ち帰る人もいる。近年、上勝町には海外からも視察に訪れる人が増えており、「くるくるショップ」を視察した際に日本人形をおみやげに持って帰ることも多い。空港で買えばそれなりの値段のものが、「くるくるショップ」なら“タダ”のため、非常に喜ばれているという。

### ③くるくる工房

2007年、リメイク商品の作製と販売をする「くるくる工房」が、介護予防活動センター「ひだまり」の中に開店した。2004年頃から、ある女性が不要になったとされる布団の綿を使って、座布団の手作りを始めた。それがきっかけとなって、要介護にならないように予防する「介護予防」のための座布団づくりの場として、「ひだまり」内に、「くるくる工房」ができた。当初は、座布団の作製・販売がメインだったが、来てくれる人が増えたということで、工房の活動も活発になってきている。

ある時、古くなった鯉のぼりがなんとか再利用できないかと大量に寄付された際、鯉のぼりでリュックサックを作ったところ、なかなかの好評だった。それがきっかけで、鯉のぼりは様々な作品となり、その中の一つの法被<sup>ほっぴ</sup>は、上勝町でのイベントの際に着られるユニフォームとして定着するようになった。町長も各地の講演に出かけた際には、リメイクされた鯉のぼりの法被で登場する。各地の企業からは、CSR（社会的責任）活動の一環として法被の注文が舞い込むよ

うになっている。その他にも、視察に来た人や、テレビやインターネットを見たという人などからの注文も次々に入るようになった。ただ、工房では、女性2人が手仕事で作業をしており、大きくお金儲けをしようとやっているわけではないため、企業などからの大量の注文の場合に



くるくる工房



「ゼロ・ウェイストアカデミー」の事務所と「くるくる工房」がある介護予防センター「ひだまり」

は、すぐには注文に対応できないということで了解を頂いている。

くるくる工房には、鯉のぼりの法被以外にも、工夫を凝らした様々な商品がある。最近、一番のヒット商品が「ふんどし」で、「下着による締め付けがない」と好評で若い人にも売れている。価格については、基本的にはリメイクした本人がつけるが、つつい安く設定しがちになるため、ゼロ・ウェイストアカデミーのスタッフからは、もう少し高くていいのではないかと話したりもする。現在の月平均の売上は6万円くらいだが、徐々に伸びてきているという。作製にあたってきた女性の一人は、「作業が楽しい」と話す。周りの人からは「ボランティアで大変だね」と言われることもあるが、「リメイク品の作製は楽しいし、「ひだまり」に来てスタッフや来訪者などの若い人と話すのも楽しい。この楽しさはやったもんにはしか分からない。(他の住民の)みんなもやればいいのに」と話す。

#### 4. 取組の幅を広げる「ゼロ・ウェイスト」

##### **チップボイラーと地域通貨でバイオマスの循環づくり**

2004年度から2006年度、上勝町では、環境省の「環境と経済の好循環のまちモデル事業」の助成金を使って、木質チップボイラーと、チップを製造するための破砕機、ダンプトラックを導入した。木質バイオマスエネルギーの利用により、二酸化炭素の排出を抑制し、林業の活性化や雇用創出の好循環を生み出すことを目指している。

全国の例にもれず、上勝町でも林業の不振により森林の荒廃が危惧されている。何とか木材を利用できないものかと考えて、上勝町では木質バイオマスエネルギーによる循環に取り組んできた。木材を燃やしても、木は育てることで再生でき、しかも二酸化炭素を吸収する。これに対して、石油や石炭は消費してしまうと人の手では再生できない燃料であり、さらに燃やすことで硫黄酸化物などの有害物質が出る。欧米では再生できるエネルギーとして木材を燃料にして発電したり、暖房に利用したりしているが、国内ではまだ実績が少ない。利活用可能な木質バイオマスがどれくらいあるのかも把握できていなかった。

2003年度、経済産業省四国経済産業局による「バイオマス等未活用エネルギー事業調査補助事業」の公募があり、上勝町はそれに採択されて木質バイオマスに関する研究を重ねた。2004年1月から3か月間で、和歌山県や岩手県などを視察し、上勝町で導入が可能か探っていった。バイオマスを実際に使うのであれば、重油をたくさん使うところに導入するのが効果的だろうということで、冷泉の<sup>つきがたに</sup>「月ヶ谷温泉」のボイラーでの導入を検討した。導入当時の重油価格は1リッター当たり34円で非常に安価だったため、コスト面では重油の方が有利だったが、木質バイオマスでも赤字にはならないということが分かった。翌年の2004年度からは、前述した環境省の助成金を利用して、月ヶ谷温泉にバイオマスボイラーを設置することになった。

バイオマスボイラーの導入により、町外から購入していた重油代金約1,100万円/年を町内で生産するチップに回すことができ、また、二酸化炭素については、年間566.58tを削

減できるようになった。しかし、町の担当職員は、まだ成功したというわけではないと話す。導入から現在に至るまで、思わぬ経費が掛かったということもあったが、逆に重油の高騰で木質バイオマスが割安になり、たまたま運良くここまで進めることができただけだと言う。

上勝町では今後に向けて、資源と経済が循環する仕組みの構築を目指している。チップは、住民が集めて持ち込んだ間伐材や未利用材等の木材を原料にして作られることから、町で



バイオマスボイラー設置の月ヶ谷温泉



商店の「ゼロ・ウェイストマーク」と地域通貨「ゼロ・ウェイストカード」

は原料となる木材を集めるために、地域通貨を試験的に導入している。町の第3セクターの「株式会社もくさん」に持ち込まれた木材は、1kg 当たり1ポイントの地域通貨が支払われ、500ポイントで500円の上勝町商工会の商品券に換金できる。商品券は、「ゼロ・ウェイストマーク」のある町内の商店で利用できる（1kg1ポイントは安過ぎるという声もあり、ポイントの増額を現在検討している）。

町では、チップボイラーを購入しようとした際、国産のものを探したが見つからなかったため、商社を通じてオーストリア製を輸入することになった。だが、「上勝町の循環方式が国内各地に広まっていけば、いつか国産品が出てくるかもしれない。オーストリア製のボイラーの耐久年数は30年です。次の買い替えの時には、国産を安く買いたい」、と町の担当職員は将来を熱く語る。

## 子供たちに好評な薪ストーブで木質バイオマスの推進

町では、2006年度には、上勝中学校と介護予防活動センター「ひだまり」に薪ストーブを導入し、上勝中学校には職員室に1基と、各学年の教室に1基ずつ、合計4基を設置した。

薪ストーブは危ないというイメージを持っているが、町内に設置されているものは、欧米の最新式のもので、昔のものとは作りが違くと町の担当職員は話す。ストーブの回りには柵が設



「ひだまり」にある薪ストーブとチップ

置され、少々ぶつかったくらいなら問題はない。2重構造の煙突も付いており、以前に利用していた灯油ファンヒーターと違って室内の空気を汚すことがないため、子供達には好評のようだ。寒い日の休み時間には、ストーブを囲んで子供たちの輪ができるといった、

別の意味での“温かさ”もある。冬の寒い日、給食のパンをストーブで焼くと非常においしらしく、子供たちの楽しみとなっている。町の食育担当者は、パン給食を減らして米飯給食を増やすつもりだったため、ストーブのおかげで複雑な心境だという。

いろいろな人に薪ストーブの暖かさを知ってもらい、木質バイオマスを広めて行くために、薪ストーブが多用されている欧米の様々な機種を購入・設置した。学校の職員室にはアメリカ製、教室にはデンマーク製、「ひだまり」にはオーストラリア製というように、機種の違うものを入れた。

上勝町は面積の86%が山林で、そのうち83%が人工林となっている。樹齢40～45年の杉が多く、本来なら出荷できるが、現在は木材価格が安すぎて伐採ができない。木材は市場までの運搬に1㎡当たり12,000円が掛かるのに対して、市場では9,000円ほどで取引される。1979年頃には1㎡当たり38,000円で取引され、上勝町には店が並び、林業従事者で賑わっていたという。しかし、今は「林業は業として成り立たない」うえに、「山は放棄されて、どんどん荒れており、このままでは保水力が弱まって水が不足しかねない」と町の担当職員は話す。

中学校では、町、森林組合、ゼロ・ウェイストアカデミーとの協働で、中学生たちに木のことや林業のことを知ってもらうために、「バイオマススクール」を開催している。中学生と保護者も含めて皆で道のない森林の斜面に入り、森林組合の人たちに指導を受けて、間伐材採取のためノコギリを引くが最初は上手くいかない。コツが分かるとノコギリの刃がリズム良く音を立てて動き出す。自分で切った木を学校まで運び、今度は木を手斧で薪にする。こうした作業を通じて山がいかに大切か、林業がいかに大変かを体験してもらい、なぜ、上勝町では薪ストーブを入れたのかを説明する。

今では、薪ストーブに使う木の組み方が、大人より子供たちの方が上手くなったという。子供たちは薪ストーブをきっかけに、いろいろなことを体験しながら学び、そうした姿を見守りながら、大人たちは環境活動を将来につないで行きたいと願っている。

## **5. 上勝町の「ゼロ・ウェイスト」における成果と課題**

### **上勝町から広がる「ゼロ・ウェイスト」運動の輪**

上勝町には、研修だけで年間約2,000人が訪れる。これに加えてメディアの取材も多い。取材では、決まって住民に「34種類ものゴミの分別は面倒でないですか？」と聞く。多くの住民は、「もう慣れたよ」「慣れたら簡単ですよ」と答える。中には、「慣れてしまうと、分別しないと気持ちが悪い」、という人もいる。中に、「めんどくさい」と言う人もいるが、住民による34種類もの分別とゴミステーションへの持ち込みは定着している。

様々なイベントの際には、ゼロ・ウェイストアカデミーが貸し出すリユース食器を使うのが、上勝町では当たり前になりつつあるという。前述のとおり、イベントで法被を着るというのも定着してきた。不法投棄のゴミも、2007年に町内で一斉清掃したら、その後は

あまり出なくなかった。「上勝町全体がきれいになってきたのではないかと、ゼロ・ウェイストアカデミーの事務局長は話す。

また、「ゼロ・ウェイスト」運動を通じて、町外とのつながりも増えた。福岡県<sup>おおきまち</sup>大木町も同じく「ゼロ・ウェイスト宣言」を行い、また、東京都町田市や熊本県水俣市では「ゼロ・ウェイスト」の計画を検討している。隣の<sup>さなごうちそん</sup>佐那河内村とも「ゼロ・ウェイスト」に関して情報交換をしている。

上勝町の住民は、町外で買い物をすることがほとんどのため、お金は町外に落ちて、ゴミは町内でお金をかけて処理するという流れになってしまっている。つまり、町内にはお金が循環せず、出て行く一方となっている。このため町では、前述の地域通貨の実験などで、地産地消を進めるよう呼びかけている。

さらに、上勝町では、町内で有機野菜を作り、量り売りをスーパーに取り入れてもらうように働きかけている。実際に、小松島市<sup>こまつしまし</sup>のあるスーパーで量り売りを取り入れてもらっており、スーパーにとっても簡易包装の実現というメリットをもたらしている。こうして、「ゼロ・ウェイスト」の活動は、徐々に町外にも広がりつつある。

## 「ゼロ・ウェイスト」社会の実現に向けて

2003年のゼロ・ウェイスト宣言から、上勝町では様々な取組を展開するとともに、住民もそれに応えてきた。これからも集落ごとにゴミの懇談会を開くなどして、現在のゼロ・ウェイストに向けた取組が住民に使いやすい仕組みになっているかを皆で検証し、高齢社会の中にも活かせる工夫を図っていく。ゼロ・ウェイストの活動と経済との関係においては、更なる雇用や地域の産業活性化につながるような取組を増やしていく予定である。

また、「ゴミを持ち込まない、買わない、つぐらない」というライフスタイルが更に町内に浸透していくように、事業所にも率先した活動と呼びかけていく予定である。

「上勝町のやっていることは、自分たちにはできない」、「上勝町は人口が2,000人ほどの小さな町だからできるのだ」、と考える自治体が多いという。しかし、世界で初めて「ゼロ・ウェイスト宣言」をしたオーストラリアのキャンベラは、人口が31万人の大都市だった。現在の上勝町の資源再成立は、約80%までに高まったが、前述のとおり、焼却処分をせざるを得ないものもあり、現在はそれを町外に運び出して焼却している。今後も、「2020年までに上勝町のゴミをゼロにする」という目標の実現に向けて、住民・事業者・NPO・行政の連携のもと、「ゼロ・ウェイスト」の活動が続く。

しかし、上勝町の本物のねらいは上勝町だけの取組では達成し得ない。グローバル化されて輸送機関が発達した現代社会において、山間地域の上勝町にも、世界中から資源が運び込まれる。同時に、上勝町に息づいてきた昔からの木材や炭といったエネルギーが生産されなくなり、山が荒れ、ゴミが増えてきた。資源の循環を考えるなら、運び出された原料をもとの国、もとの地域に返さなくてはならない。とても、上勝町だけで完全に解決できる問題ではない。

現在の国内のリサイクルについて、町長は、「今の法律では、テレビや冷蔵庫は不法投棄をした人が得する。だから、山や海にこっそり捨てる人がいる」と、問題を指摘する。山間地域や離島などは、都市の大量消費のしわ寄せを受け続けてきており、上勝町でも、多くの不法投棄が見つかった。見えていても簡単に取りに行けないような傾斜地に投棄されていることもあり、回収には非常に苦勞すると、ゼロ・ウェイストアカデミーのスタッフが話す。

現在の日本の法律では、ゴミの回収は消費者がお金を出して引き取ってもらい、不法に投棄した人を罰するという方法をとってきた。「(不法投棄は) 見つかったら大変な罪になる。罪を犯した人の家族や親類まで不幸な目に会う」と、町長は話す。そこで、上勝町では、製造企業に資源の回収を義務付ける「資源回収法」を2020年の実現に向けて提唱している。タバコの吸殻も1本10円で回収すれば、ポイ捨てはなくなる。タバコが500円になっても、吸殻で200円が返ってくるのであれば、次には300円を支払うだけで済む。「良いことをしたら得するという法律にしなければいけない」と、町長は思いを熱く語る。そして、海外からの視察者も増える中、町の職員や住民たちは「小さな町でも世界に大きな影響を与えることができるのだ」と信じて取り組んでいる。